第３　問題作成部会の見解

世　界　史　Ａ

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問

第１問は,「社会に対する訴えの手段として用いられたポスターや風刺画等の図像」をテーマとして作問した。いずれの問題についても，正答率・識別率の面で妥当であった。

Ａでは，プロパガンダの手段としてジャンヌ=ダルクを用いた二つの図像を取り上げ，資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを問うた。

Ｂでは，20世紀初頭の風刺画「時局図」を資料として取り上げ，資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する力を問うた。いずれの小問も識別力が高いと判断できる解答結果となった。

Ｃでは，19世紀末にドイツで発表された寓意画を資料として取り上げ，寓意画の意図とリード文の読み取りから，近代の列強の動きとそのアジア進出に対する理解を問うた。問７はやや難問であったようだが，いずれの小問も識別力が高いと判断できる結果となった。

第２問

第２問では，大航海時代におけるヨーロッパとアジアの交流およびローマ法の歴史に関する授業という場面設定を行い，資料や会話文を歴史の知識を利用して解釈する力を問うた。一部正答率が低い問題も見られたが，全体として正答率，識別性ともに妥当であったと考えられる。

Ａでは，大航海時代の資料と会話文をもとに，近世におけるヨーロッパ人のアジア進出について考察する力と,ヨーロッパとアジアとの交流の様子について読み取る力を問う目的で作問した。

Ｂでは，ローマ法の歴史を題材とした授業を取り上げた。会話文を基に，ローマ法の中世における形成について，そしてこれが日常生活で活用され，近代以降のヨーロッパの法に影響を与えたことを理解させることを目的として問いを作成した。

第３問

第３問は「世界史上の帝国とそれを取り巻く情勢」をテーマとした。いずれの小問についても，正答率・識別力の面で妥当であった。

Ａでは，中国歴代王朝の都の是非について述べられている文章を資料として取り上げ，資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを問うた。

Ｂでは，ビザンツ帝国の周辺諸民族に関する資料を題材とした授業を取り上げ，古代・中世のヨーロッパ大陸における，人々の移動にまつわる資料を読み取って歴史的な状況を理解する力を

問うた。両問とも正答率は適正なばらつきをみせ，妥当な設問であったと考えられる。

第４問

第４問は「人の移動の歴史」をテーマとし，表やグラフを素材として，それらから読み取られる事柄と世界史で学んだ知識を結びつけて，考察する力を問うた。

Ａでは，19世紀後半から20世紀初めまでの大陸間移民数に関する表を資料として取り上げ，交通の手段や要地の開発に関する歴史的事象の知識の有無や，表から必要な情報を読み取る力を問うた。いずれの小問についても正答率・識別力の点で妥当であった。

Ｂでは，グラフや資料解説から読み取った情報を基に，第二次世界大戦前後における中国の歴史的事象を考察する力や，世界史上の移住・移民について理解する力を問うた。

第５問

「世界史上における民主化の動き」をテーマとした。第５問全体としては，妥当な識別力をもっていると評価できる。

Ａでは，「戦没者の谷」と呼ばれる聖堂を素材として作問した。解説文の文脈から適切な歴史的事象を推察する力や，解説文の要旨を読み取る力を問うた。

Ｂでは，光州事件の際に大学生が出した声明文を資料として取り上げた。解説文の文脈から適切な歴史的事象を推察する力と，資料の要旨を読み取る力を問うた。

Ｃでは，チェコの首都において旅行者とガイドが会話をしている場面を取り上げた。第二次世界大戦後における歴史的事象の時系列について理解する力や，冷戦下及び冷戦終結後の出来事について捉える力を問うた。各問とも概ね識別力が高かった。

３　出題に対する反響・意見についての見解

第１問

Ａでは，問１に関しては，設問に資料からの読み取りを入れれば，さらに思考力を問う良問となったであろうとの意見もあった。問２はリード文と図版の内容をしっかりと理解したうえで，高校で学習した知識を基に解答を導く問題であり，適切な問題との評価を受けた。

Ｂでは，問３については，資料の読み取りから知識と思考力の双方を問う良問との評価を受けた。また，問５についても，資料の読み取りから概念的な知識の理解を問うことが出来る問題として「特に良問」との評価を受けた。今後の作問においても，これらの評価を指針としたい。

Ｃでは，問８についても問いかけを工夫すれば，ともに思考力を問う問題となり得たとの指摘があった。一方，問７については，リード文を読み取るための知識と，意図を推測させる思考力の双方を問える良問との評価を受けた。

第２問

Ａでは，資料の読み取りにさらなる工夫があれば良問になったのではという評価があった。全体として難易度は妥当であったと考えられる。

Ｂでは，問５の正誤の組合せはやや難易度が高かったようである。資料の読み取りを加えた出題にすれば，思考力を問う設問になる可能性があったとの指摘を受けた。今後の作問に生かしたい。

第３問

Ａでは，問３で資料を読み解きつつ，時代が異なると北京の空間的性質も異なるということを問うた点が良問として評価された。問１は資料中の「江南」に気づけば地図中の江南地方の都市が１つしかないため事実上一択になったとの指摘があった。

Ｂでは，知識にくわえて，切り口や資料の提示にさらなる工夫が見られれば，良問となったで

あろうという評価があった。

第４問

Ａでは，問１については知識問題であるとの指摘を受けた。問２については，表の単純な読みとりであると指摘を受けた。思考力・判断力・表現力等を問うように，表をより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

Ｂでは，いずれも基本的な知識を問う問題との評価を得たが，問３に対しては，より思考力等を問える形にすべきとの指摘をいただいた。また，問４についても地図を利用した問題にする方法もあったのではないかとのご意見をいただいた。ただし，本拠地の移動の違いを考察させようとする意図については高く評価されたため，それを生かす設問方法を模索していきたい。

第５問

Ａでは，問１は，適切な問題という指摘を受けた。歴史的思考力を問うために読み取り部分の工夫を求める意見もあったが，識別力は高く，問題としての妥当性があると思われる。問２は，基本的知識を問う問題となっていると指摘されているが，近代イタリアについての知識が時系列的に整理されているかで，識別力の高い問題となっており，妥当な出題と考えられる。問３は，リード文との関連性が不十分だとの指摘があったが，本問は世界史Ａ全体の中で最も良好な識別力を示しており，妥当な出題と考えられる。

Ｂでは，問５については，知識問題という評価がなされたが，問４については，資料の読み取りと知識を組み合わせた適切な問題と評価された。

Ｃでは，問６と問８については，基本的な知識を問う問題であると評価された。問７については，改革名と指導者の組合せに改革内容の資料読み取りを加えることができれば思考力を問う良問となったという指摘があり，今後の検討課題としたい。

４　今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上，問題作成部会として，各問の出題意図と，設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ，問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず，分量としては，資料や文章量ともに適切であると評価された。難易度についても，日常の授業で対応できるものであり，共通テストとして適切であるとの評価であった。一部の教科書に記載がない知識の出題があったと指摘されたが，指導要領に対応しており，問題はないと認識している。

リード文や資料を見ずに，設問文だけで答えが導き出せる出題を脱却することに努めたが，この点についても昨年度と同様，一定の評価を得たと考えている。

出題のバランスについては，地域別では，ヨーロッパ・南北アメリカで過半数を超え，東・内陸アジアを加えると８５％以上となる。分野別では，政治史を中心とした問題構成となった。こうした偏りは，科目の特性上致し方ない部分もあるが，いささかバランスに欠けるかもしれない。時代別では「世界史Ａ」の指導要領・教科書のテーマに即して，近世から戦後にかけての時代に重点をおき，古代・中世にかかわる問いは４問に抑えたが，個別の知識ではなく，資料から読み取れる内容を中心とした出題が望まれるとの指摘をいただいた。こうした世界史Ａという科目の特性に対する指摘を基に，今後の出題の改善につなげたい。

扱った資料に対しては，一部写真などで活用できていない部分も見られたが，「読取りや思考を促すために概ね効果的に使われていた」との評価を受けた。一方で，会話文や解説などが十分に活用されていたとは言えず，出題に工夫が求められると指摘された点は，今後改善を図りたい。同様に，

大問のテーマと小問との関連性をより深める問題構成を意図しているが，まだ不十分であるとの指摘を踏まえ，その点についても今後さらに改善を進めていきたい。

共通テストで問うべき力として，資料の読取りや文章中からの情報収集を基に，文脈を踏まえながら論理的な整合性から正答を導く問題や，単純な知識を問うのではなく，概念的理解を問う問題への評価が高かった。他にも，資料から読み取った情報を基に，知識を踏まえて考察，構想する力を，総合的に問うている点が評価された。なお，年代整序など前後関係に着目して解答する問題について，現段階では単なる年号暗記問題となっているが，こうした問題は，事象の因果関係など事象同士の関わり合いを考察させる手段となり得るため，出題形式について，工夫が求められるとの指摘があった。

以上の指摘・意見をふまえて，基礎的な歴史知識を活かした「歴史的思考」に受験者を導き，思考力・判断力・表現力等を測定する設問を作るよう心がけたい。

世　界　史　B

1　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2　各問題の出題意図と解答結果

第１問

第１問は「世界史上の学者や知識人」をテーマとした。

Ａではシーボルトを題材として取り上げ，資料の文脈から捉えた地名を地図上に位置付ける力や，古代から近代にかけての中国と朝鮮の関係についての理解を問うた。いずれの小問も平均点・標準偏差は適正な範囲内におさまった。

Ｂではイスラーム教徒の伝記記事を資料として取り上げ，イスラーム出現以降の社会の変化についての理解を問うた。

Ｃでは王国維の論文を資料として取り上げ，資料から読み取った情報や習得した知識を活用し，歴史的事象の推移ついて考察する力を問うた。正答するためには，地域間の接触や交流などが歴史的事象にどのように作用したのかを明らかにすることが必要である。

第２問

第２問は「ある出来事の当事者の発言や観察者による記録」をテーマとした。

Ａではチャーチルの著書を，Ｂでは冷戦期のアメリカ合衆国大統領の演説をそれぞれ資料として取り上げ，歴史的事象や人物の事績を考察する力，資料を読み取る力を問うた。いずれの中問も，正答するためには，資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推することが必要である。第２問全体として，妥当な難易度となった。

第３問

第３問は「世界史上の人々の交流と社会の変化」をテーマとした。

Ａでは明治期の小説を題材とした授業を，Ｂではアジア及びヨーロッパの人口等の推移を示した表を題材とした授業を，Ｃではオセアニアの先住民を題材とした授業を，それぞれ設定した。

第４問

第４問は「歴史評価の多様性」をテーマとした。

Ａではスペイン内戦の最中に出版された書物を資料として取り上げ，読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する力や，歴史的事象に対する異なる見解について，その根拠を考察する力を問うた。問３はやや難問であったが，いずれの小問も識別力を有する問題であったと判断される。

Ｂではロシアの君主と皇子を描いた絵画を資料として取り上げ，やはり資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する力を問うた。問５がやや難問であった一方で，問６は正答率が高く，全体としてはバランスが取れていたと考えられる。

第５問

第５問は「世界史上の墓や廟」をテーマとした。

Ａでは，サン=ドニ大修道院付属聖堂内の墓棺群の配置推定復元図を資料とし，Ｂでは，関帝の写真を題材とした授業を取り上げた。いずれの小問についても，妥当であった。

３　出題に対する反響・意見についての見解

第１問

Ａでは，問１について，包括的な内容を踏まえた知識問題であり，選択肢の内容にも工夫が見られたと評価された。

Ｂでは，問４について，資料の活用や包括的な知識を問うという面で優れた問題であるとの好評価を得た。問６については，知識だけではなく「イスラーム帝国」の概念的理解を問う問題として，共通テストの方式に適合した問題であるという評価を得た。

Ｃの問９は，二つの肢文を挙げ，ある民族・集団とは別の民族・集団が残した資料に基づく研究の例に当てはまるか否かを考えさせるという，新たな形式の問題である。問われている内容を正確に理解しつつ世界史知識と組み合わせて解く点で，思考・判断の能力を問う良問として評価された。

第２問

Ａでは，問２について，植民地という歴史的事象が時系列的に整理されていることが必要であり，地理的空間把握と歴史的事象との関連を問う良問という評価を受けた。

第３問

Ａでは，問３に関して，歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が重視し，二つの事象の関係性に着目させることで日朝修好条規についての包括的な知識を問うている点が評価された一方，冊封体制を含めたより大きな視点から出することで，日本を中心に時代を読み解く概念を問う問題とすることも出来たのではないかとの指摘も受けた。今後の問題作成に生かしたい。

Ｂの問５が歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について総合的に考察させる良問との評価を得た。今後も，こうした評価が得られるような作問に努めたい。

第４問

Ａでは，問２について，二つの異なる事象を一つの選択肢に組合せるのではなく，相互に関連し合う二事項を結びつけた方が，問題として質が高いとの指摘があった。今後の参考としたい。一方，問３については，概念化された知識を元に，歴史の解釈に対する根拠を考察する問題であり，「思考を問う良問」「非常に意欲的な問題」「高校での学習を踏まえた上で出題の意図に合致した良問」等々，高い評価を得た。こうした根拠を問うような問題作成を今後も積極的に出題していきたい。

Ｂでは，問５については，税制度についての概念的知識を問う問題に昇華できた可能性はあるが，賦役黄冊についての包括的な知識が問われた良問である，問６については，誤答選択肢の質を高めたり，仮説と検証を一体化させて問うたりするなど，さらなる改善の余地はあるが，史実の知識を根拠として推論を立て，その妥当性を問うことで論理的な思考力を問う良問となっている，との評価を受けた。今後，指摘のあった点を課題としながらも，こうした良問との評価を受ける問題の出題を積極的に進めたい。

第５問

Ａでは，問２に関しては，選択肢に改善の余地があるとの意見があったが，基本的には知識を基に図版を利用して当時の歴史的背景を考えさせる問題であった。

Ｂでは，問４は，標準的な移民と異なる事象を選択肢に入れて移民についての理解を問うなどの工夫で,移民の概念的理解や思考を問う問題に昇華させられたのではないかとの指摘があった。そうした指摘を踏まえ，今後の改善に努めたい。問６は，明代の経済の特質を与えた影響までを含めた包括的知識を問う問題という評価を得た。

４　今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上，問題作成部会として，各問の出題意図と，設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ，問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

問題作成にさいしては，受験者の知的な興味を喚起するような資料やリード文・会話文を提示することにつとめた。よって，分量についてはやや多くなったと考えていたが,「試験時間に見合った適切なもの」との評価を得た。令和３年度の共通テストを踏まえ，分量については一定の理解を得たものと考える。一方,難易度については,令和３年度に比べてやや低かったという評価であった。単純な知識や年代を問うような設問や，単純な読み取り問題が散見したことが背景として考えられるという指摘を受けたので，今回の結果に対する分析を深めたうえで，今後の改善に努めたい。

出題のバランスについては，近代以前が12問，近代以降が17問で，複数の時代をまたがって問うたものが５問であった。地域としては，東アジアに関する問いが30％弱と高い割合であり，古代史が出題されなかった点と合わせて，受験生にとって取り組みやすかったと思われ，予想外に平均点が高かったことの一因であろう。文化史についての設問は４問あるが，単純に作品名や作者名を問うのではなく，その業績や内容，時代背景やその歴史上の位置づけにかかわるような問いの作成を心がけた。

問いの対象となる資料については，グラフ，写真，文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。これは，問題作成方針の基本的な考え方にある「資料やデータ等を基に考察する」ことを重視したためであり,「多様な資料，図版，図表，データ，場面設定などを組み合わせた出題方式を来年度以降も続けて欲しい。」との評価にもあるように,好意的に受け止められていると考える。一方で，リード文や資料の良さが，設問に十分に活用されていないのではないか，という指摘もあった。リード文や資料と設問との関連性には，これまでも注意を払っていたところであるが，今後もより一層の改善を図りたい。

また，単純な事実的知識ばかりではなく，その歴史的事象の内容や因果関係など内容の理解を前提とした包括的理解を問う問題，さらには歴史的事象が持つ意義や意味などの概念的理解を問う問題の出題を意識した。そうした試みは,「問われる知識の質を高めようという努力が見られた」というように，一定の評価を得たと考えている。このことを今後の問題作成の励みとしたい。「思考力・判断力・表現力等」を問う問題においても，一定の評価を得られる出題ができたと考えている。事実的知識としては正しい選択肢をそろえながらも，リード文や資料，問いかけ文の記述を踏まえながら，論理的に考察し，正しい解釈として正答を導く設問は，いずれからも高い評価を得ており，今後も継続して作題してきたい。

資料やリード文から読み取れる情報を基にして，既習内容から得られた包括的・概念的理解を踏まえ，論理的に考察し構想することで正答にたどり着く問題を，今後も求め続けていきたい。

昨年来課題となっている「仮説」を問う問題についても，資料やリード文から適切な仮説や因果関係についての説明を選択させる問いの作成を昨年度から引き続き，試みている。新学習指導要領の歴史科目においても，生徒が問いを立て，問いに対する仮説を表現し，複数の資料を基に検証していく学びが想定されている。そうした中で，仮説の妥当性をはかる問題は，論理的思考力を評価

できるものとして今後も継続して出題して欲しいという評価もあり，今後も積極的な出題を目指していきたい。ただ，授業のなかで習得した知識によって，仮説や説明の適否が明確に判断できるような選択肢を用意することは簡単ではなく，年代が合致しない事柄や，明白な誤りを含む叙述を選択肢群のなかから除外するという方法によって正答を見つけ出すような問いになってしまう傾向は昨年来解決されていない。今後，「示された仮説を検証する」際に，「論理的整合性を基にした妥当性のある根拠を問う問題」などの提案を踏まえて改善を図っていく。